

第十一回オール筑波算数サマーフェスティバル参加報告

長地小学校 大道健人

- 1 視察実施日 平成 30 年 7 月 14・15 日(土・日)
- 2 視察校 筑波大附属小学校公開 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1  
第 11 回オール筑波算数サマーフェスティバル  
(第 62 回『算数授業研究』公開講座)  
公開授業：夏坂哲志 盛山隆雄 細水保宏 (OB) 田中博史  
講演：森本隆史、大野桂、中田寿幸、山本良和  
企画運営：フェスティバル実行委員会
- 3 視察目的 新学習指導要領の導入により、算数の授業はどのように変化していくのかを学び、自校の研究に生かしたい。

4 研修報告

「『主体的・対話的で深い学び』のある算数授業をどうつくるか」というテーマが、まさに学習指導要領改訂を目前に控えた私の自己課題であったため、今回の県外視察に参加させていただきました。二日間にわたり筑波大学附属小の 4 学級の授業を参観したのですが、いずれの授業も子どもたちがいきいきと学習している姿が印象的でした。

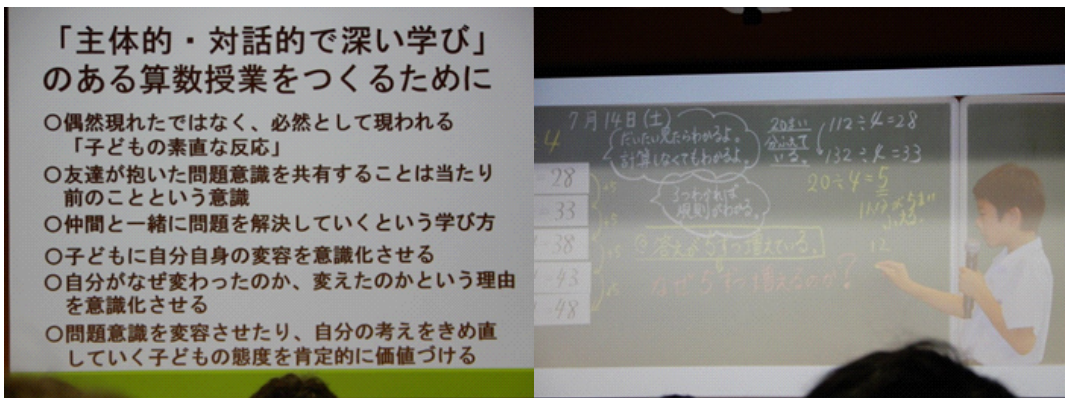
例えば、二年生では、「たし算とひき算の計算のくふう」の授業を参観しました。まず教師が「めくってポンゲームをしよう。」と伝え、クラスを 2 チームに分けます。両チームが交互に (2 位数 2 位数) の計算問題がかかれたカードを一枚ずつめくって答えを求めます。すでにめくられたものと答えの一致するカードを引き当てれば、そのチームにポイントが与えられます。子どもたちはゲームにのめり込みポイントを欲しがって一喜一憂するわけですが、もちろん教師のねらいはその後です。カードを見て、答えを求める子どもたちから、「この計算は筆算でやらなくてもいい。」というつぶやきが出ます。答えの一致するカードを意図的に縦に並べることで、「片方(下)の計算の方が楽」と気づく子どもが出てきます。「なぜだろう」ここで子ども自ら『問い』をもちます。それぞれのひかれる数やひく数に着目し、言葉をまとめていく中で「ひかれる数、ひ

$96-19=77$	$74-29=45$	$46-18=28$
$97-20=77$	$75-30=45$	$48-20=28$

く数に同じ数をたしてもひいても答えはかわらない」という計算のきまりを見つけたのです。後半はこのきまりを使って (3 位数 3 位数) にまで場面を広げて終末を迎えました。

このような授業から自己課題として挙げられることは、主体的な授業を行うために、教師が与える「学習問題」と子どもがもつ「問い」を明確に分け、子ども自らが疑問や問いに気づくしかけをしていくことです。本当の意味での主体的な学びとは、子どもが問題を見だし、解決の計画や実行、解決したことの検討をすることです。主体的な学びがなければ対話的な学びも深い学びも生まれません。子どもたちが「授業が楽しい」と心から思うために、教師と呼ばれる立場の私が、学び続けることをやめてはいけないと改めて感じる研修でした。

参考) 第 65 回『算数授業研究』公開講座サマーフェス 2019 年 7 月 13 日 14 日



「主体的・対話的で深い学び」のある算数授業をつくるために

- 偶然現れたではなく、必然として現われる「子どもの素直な反応」
- 友達が抱いた問題意識を共有することは当たり前のことという意識
- 仲間と一緒に問題を解決していくという学び方
- 子どもに自分自身の変容を意識化させる
- 自分がなぜ変わったのか、変えたのかという理由を意識化させる
- 問題意識を変容させたり、自分の考えをきき直していく子どもの態度を肯定的に価値づける